

# 一面を削った棒

## 1 はじめに

『紀要 2015』において、平城宮・京から出土した土器に刻された列点記号について、現代韓国のユンノリという盤上遊戯の盤面との関連性に注目し、『万葉集』の研究成果もふまえて、列点記号を記す器物が盤上遊戯の盤面として使用されていた可能性を提起した<sup>1)</sup>。その後、この遊戯に使用された遊具の可能性をもつ遺物(図41・42)を見出したため、資料の報告と若干の検討をおこなう。

## 2 盤上遊戯「樗蒲(かりうち)」とその遊具

列点記号を盤面とする遊戯の名前は、『和名類聚抄』術芸部雑芸類で「和名加利字知(かりうち)」とする「樗蒲」にあたる考えられる。これは『万葉集』で「かり」と訓じる「折木四」(巻6-948)、「切木四」(巻10-2131)の表記と関係し、4つの「かり」を「うつ」遊戯の意味で、「かりうち」と呼称されていたと考えられている<sup>2)</sup>。

奈良時代の盤上遊戯「かりうち」の遊具は、6分割タイプの列点記号を記す盤面と「かり」と呼ばれる4つの木製品、および駒から構成されたと考えられる。

## 3 「かり」の形状について

『万葉集』の「かり」 『万葉集』では「切木四」「折木四」と表記されることから、「かり」は木製で切る・折るなどして作っていることがわかる。また、その組み合わせとみられる「一伏三起」(巻12-2988)・「一伏三向」(巻13-3284)・「三伏一向」(巻10-1874)の表記から、単なる表裏ではなく、伏せたり起きたりする二面性をもつ立体的な形状であることが推測される。

ユンノリの「ユッ」 ユンノリでは、「ユッ」と呼ばれる4本の棒を用いる。朝鮮半島では少なくとも3種類のユッがみられ、両端を細く削る長細いチャンチャクユッ(장작웃)と小型のパムユッ(밤웃)(図43)の2種類があり、さらに朝鮮半島北部では豆ユッというものも存在する<sup>3)</sup>。このうち、現代韓国ではチャンチャクユッが一般的なユッとして市販されている<sup>4)</sup>。

これら3種類のユッからは、長さや材質が異なるもの

の、いずれも平坦面と曲面からなる半円形・かまぼこ形の断面を呈する共通点が抽出できる。

「かり」の属性 以上をふまえると、「かり」は平坦面と曲面の区別が付き、断面かまぼこ形もしくは半円形を呈する木製品である可能性が高く、折る・切る程度の簡単な加工を加えたものと想定される。

筆者は岩手県柳之御所遺跡SD39出土木製品<sup>5)</sup>(図44)がこの属性を有する典型例と考える。これは下面が削られており、それ以外は長手方向のケズリにより、曲面を呈するように加工している。断面円形の棒状材の一面を平坦に削り、それ以外は曲面を呈するように削った後、切り込みを入れて折り取って製作したと考えられる。

さらに、現在整理作業を進めている平城宮跡東方官衙地区大土坑SK19189<sup>6)</sup>から次のような2点の木製品が見つかったため報告する。(小田裕樹)

## 4 東方官衙地区SK19189出土木製品

木製品の形状 SK19189の木屑層から出土した。断面円形の細長く直線的な枝を用いて、一端を面取りし、丸木の1/4程度、板目面が露出するように一面を平坦に加工することで断面形をかまぼこ形に成型する。加工した平坦面には、上方にやや隙間をあけて墨書がなされる。不鮮明ながら「□人廣□」(1)、「土□万呂」(2)とみられ、いずれも人名の可能性が高い。他の弧状となる面には加工痕は見られず、一部に樹皮が残存する。上端は切れ込みを入れて折り取り、下端は折損する。長さは残存長で1が6.3cm、2が5.3cm、幅と厚みは両者とも同じく、それぞれ1.0cm、0.8cmである。(芝康次郎)

木材組織 実体顕微鏡を用いた木口面と板目面の表面観察による木材組織の検討をおこなった。2点はいずれも散孔材の広葉樹で、放射組織の幅は1~3列程度であり、集合放射組織は観察されない。なお、道管の複合状況などは観察できなかった。年輪数はいずれも3層で、2層目および3層目にあて材に由来すると考えられる周囲より色が濃い部分があり、その形状がよく似ていることから同一木(枝)の可能性が高いと考えられる。なお、マイクロフォーカスX線CTを用いた内部構造観察を試みたが、水浸状態であるため細胞壁と水との境界が観察されず、木材組織を認識することはできなかった。

(星野安治)



図41 SK19189出土木製品

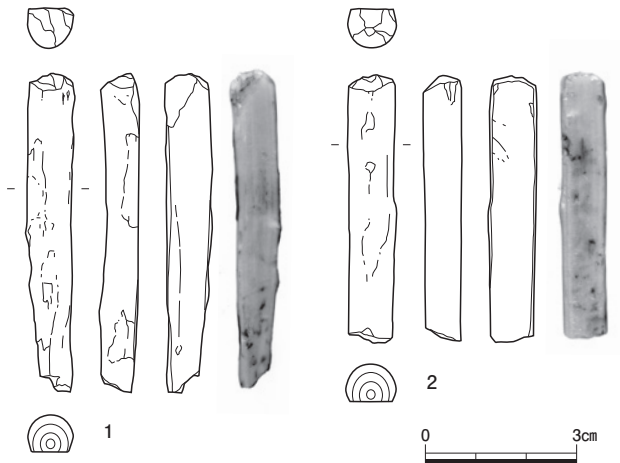


図42 SK19189出土木製品 (実測図は2 : 3、写真は赤外線撮影)

## 5 若干の検討

SK19189出土木製品は、まず樹皮がついた枝を削り一面のみが平坦面をなす形態をつくり、そこに切り込みを入れ、複数に分割したものとみられる。これは柳之御所遺跡例と同じ製作工程である。

筆者は本木製品が「かり」に該当する可能性が高いと考えるが、平坦面に人名とみられる墨書を記す点は問題を残す。墨書が棒を複数に分割する前におこなわれていた場合、一面を削り墨書を施した棒を「かり」に転用したと考えられるが、このような棒状の木筒の類例は少ない。他方、分割後に墨書を記したとすると、墨書はこの木製品の使用方法に関連すると考えられるが、ユンノリのユツの使用方法からは墨書の意味を説明できず、「かりうち」以外に使用された木製品の可能性が残る。

本木製品が折損しており、墨書も読み切れない以上、両者の可能性が想定されるため、この木製品を「かり」とは断定できない。しかし、上述の「かり」の属性を有する資料として提示したい。今後、一面を削る棒の類例の蓄積を待ち再度検討したい。



図43 バムユツ<sup>7)</sup>

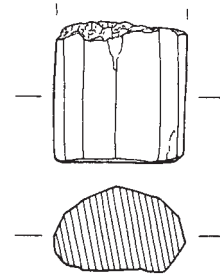


図44 柳之御所遺跡出土木製品<sup>5)</sup> 1 : 4

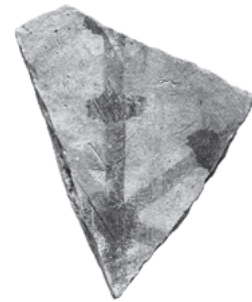


図45 SK19189出土土師器の列点記号

なお、SK19189からは「かりうち」盤面とみられる墨書による列点記号を記す土師器片も出土した(図45)。杯または皿の底部外面に、放射状の墨線を引いた後、墨点を記す。筆者が分類する6分割タイプの列点記号の中心付近の破片である。現在も整理作業中であり、同一個体の破片が見つかることが期待される。

本研究の成果の一部は平成27年度公益財団法人高梨学術奨励基金「古代の盤上遊戯「樗蒲(かりうち)」の復元に関する考古学的研究」に拠っている。(小田)

### 註

- 1) 小田裕樹「列点を刻した土器」『紀要 2015』。
- 2) 垣見修司「『万葉集』と古代の遊戯—双六・打毬・かりうち」『唐物と東アジア』66-80頁、2011。
- 3) 朝鮮総督府『朝鮮の年中行事』16頁、1931。劉卿美「ユンノリのさいころについて」『遊戯史研究』第17号、30-41頁、2005。
- 4) 小田裕樹「現代ユンノリ遊具の考古学的分析」『考古学は科学か 田中良之先生追悼論文集』上、111-130頁、2016。
- 5) 岩手県教育委員会『柳之御所遺跡—第56次発掘調査概報』2003。
- 6) 奈良文化財研究所『紀要 2009』。
- 7) S. Culin, *KOREAN GAMES*, The Brooklyn Museum in association with Dover Publications, Inc., 1991。